

# カフェ型活動の展開と課題

志賀 文哉

## The Growth and Issues of Café-type Activities

SHIGA, Fumiya

### 概要

本稿では全国で展開されている「カフェ型活動」についてその現状を整理し、課題を示した。様々な目的で実施されているカフェ活動は交流や対話の場となっており、運営者・参加者とも様々な人々を、様々な形態で受け入れる柔軟性や包摂力を有している。ただし、ただカフェの場を設ければ人が集まるものではないこと、継続には安定した財源など基盤が必要であること、担い手の確保が必要であることが当面の課題と考えられる。

キーワード：カフェ型活動，交流，対話，居場所

Key words : Café-type activities, intercommunion, dialogue interactions, one's places

## 1. はじめに

厚生労働省が2015年に明らかにした認知症対策「新オレンジプラン」では、増加する認知症者への対策を7つの柱で示している。そのうち、「認知症の人の介護者への支援」として新たに「認知症カフェ」等を地域の実情に応じて実施していくとする。<sup>1</sup>これは、「認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う」場所を設けることで介護者の負担軽減を目指すものである(厚生労働省, 2015)。そこには認知症者にとって住みやすい地域づくりを目指していることがうかがえる。また経済産業省が「若者自立・挑戦プラン」の中で行っている相談支援事業には「ジョブカフェ」があり、モデル事業を経て地域に定着し、さらに機能強化が図られていることから、政策の中で利用される手法の一つとみることができる。

一方、民間で行う活動の中にも後述のように種々の「カフェ」を冠した活動が散見され、そのような場が

地域に広く浸透しつつあることがうかがわれる。

この「カフェ」という形態は種々様々なものがあるが、いわゆる商業ベースの、営利活動としてのそれとは異なることは明らかであり、リラックスした環境で相互に打ち解けあえるカフェの特徴を活用して、交流や対話を生成する場所、さらにはその他の課題解決の環境づくりや福祉文化の醸成に寄与する場所と期待されている。

本稿では、このような多様な事業や活動を「カフェ型活動」として注目し、「カフェ型活動」の特徴や現在の展開、また活動の意義や課題について論ずる。

## 2. カフェ型活動とは

「カフェ型活動」に明確な定義はなく、開催する場が提供するもの、参加者が求めるものは多岐にわたり、その種類は自然科学にも社会科学にも開かれている。多様であるが、何かを共有しているのであり、以下にまとめた。

表 カフェ型活動の分類（筆者作成）

主な共有の視点	類型・特徴	例
課題の共有	医療系、福祉系、労働系	認知症カフェ、ジョブカフェ
目標の共有	ワークショップ	各種の朝活(英会話、コミットメントなど)
知識・思考の共有	学習系	哲学カフェ、サイエンスカフェ
意味づけの共有	ホールシステム・アプローチ <sup>ii</sup>	ワールドカフェ
居場所の共有 (社会的居場所)	定点的・定期的 その場に参加することに意味があり、その場で、あるいは、その後何かをすることは必ずしも求められない。	原則として集う場所が決まっており、また定期的に開催されるもの

上述の認知症に関わるプランの他、政府が進める地域の医療福祉推進の取り組みである地域包括ケアシステム整備など医療者が地域に関わることが重要性を増している。(孫, 2015)2010年にカフェ型コミュニケーションである「みんくるカフェ」を開始した孫大輔医師は地域住民や患者と医療者のための「対話の場づくり」の重要性を強調する。自身が家庭医療を専門とされる中で、外来患者とのコミュニケーションの不足を感じ、「フラットで自由な場」の創出が必要と感じた経験が大きい。そのような思いをもとに「みんなが来る」場所づくりとして結実していったのである。この場での対話の持つ意味は「自由に考えを述べられる」「互いの声を聴き合う」「お互いの視点の違いに気づく」などを通して「気づき」を得られることにある。

医療者と患者やその家族との対話の必要は決して新しいものとはいえない。医療社会学の中で議論されてきたものであるし、保健医療福祉の連携の必要が言われる中でも繰り返し指摘されてきた経緯がある。しかしながら、具体的な仕組み=場を創設して具体化するには時間を要したものといえる。

「哲学カフェ」は哲学のための民間の公開討論会として1990年代にフランスで始まり、富山県内でも盛り上がりを見せている。(北日本新聞, 2015)「社会的立場を離れて意見を交わし、考えること自体の楽しさを味わう」ものとされている。

「意味づけの共有」は「対話型コミュニケーション」でなされる。「事実に対するお互いの考えや意味づけを相互に理解しあうプロセス」を重視する。企業内での組織凝集性を高める取り組みで活用され、例として挙げた「ワールドカフェ」は「人々の自由な関係性作りを促す、オープンでリラックスした場づくりに加え、対話を促すために適切な『問い』を設定することが重

要」とされる。

この種の活動の全国的な広がりの様子（早さや順調さ）をみると医療に限定されないところでもニーズはかなり広く潜在的に存在していたと考えられる。もっとも、地域医療や地域保健でも様々な実践がなされてきたし、福祉では市町村社会福祉協議会を中心に展開されてきた「サロン活動」が広く知られている。しかしあえて本稿で取り上げる「カフェ型活動」が従来とは異なる要素あるいは注目すべき変化を含むとすれば、地域住民の主体性の成熟化というところにあるのではないかと思われる。上記にみた様々な考えの表出と共有、そしてそこからの新たな知見等の発見に関心や異議を見出せるようになるには、場の提供が誰によってなされるとしても、そこに集うものの関心や積極的な行動が重要である。主体的に関わって「楽しい」と感じ満足を得られる人が増えていることはこうした活動を展開し維持していくのには欠かせず、そのような場を展開することの醍醐味を感得する段階に入ってきていることを「カフェ型活動」の広まりが示していると思われる。

孫氏は活動の継続のために必要なこととして「仲間」や「スタッフ自身が楽しむこと」を挙げている。前者の「仲間」は医療職だけでなく、一般人・地域住民を広く巻き込んだものと考えられている。場への参加が受動・客体から能動・主体へと移る時、その場の運営は多様で多層的な人の関わりにより安定化する。

### 3. 全国にひろがるカフェ型活動

医療・福祉に関わるものについては公的な施策的支援や当事者やその家族への対応の必要性もあって医療・福祉の専門職が関わっていることが多いが、一般のボランティアやサポーター養成講座修了者など専門

職でない人らも主な主体として関わっているところに「カフェ型活動」の柔軟性や包摂力が現れている。

福井県にある認知症カフェ「福井キャラバンメイト」は厚生労働省が2005年から始めた「認知症サポーター養成講座」を定期的に開催する団体であると同時に「みんなの保健室」とも連携して認知症カフェを開催しており、スタッフは医師・看護師などのほか、社会福祉士や管理栄養士、介護福祉士、作業療法士ら専門職が関わると同時に、傾聴ボランティアや認知症サポーターらのボランティアスタッフが話し相手や相談窓口配置されている。(里, 2015)

また、学問的な傾向が強い「知識・思考の共有」型のサイエンスカフェには科学コミュニケーション活動として理科教育と連携していくものが注目される。九州大学を中心として展開されてきた「コドモ to サイエンスカフェ」は学生団体の活動を発端とし、文部科学省の「子どもゆめ基金助成事業」を活用しながら継続実施されてきた。その活動を通じてこの連携にとって重要なことを、「サイエンスカフェの主催者、小学校理科の教員が互いの存在を意識して子どもたちの疑問に対する回答を行うこと」及び「子どもが両者の特性を理解して能動的に学べるようにすること」(坂倉, 2015)と示しており、理科に関わる教育・学習への取り組みがはっきりしている。

このようにみると、それぞれの目的にあった活動がなされており、各活動の実施が目立つ。しかし、サイエンスカフェにおいても「人々が日常的に利用するカフェのような場が会場となり、対面的な対話や双方向的なやりとりが重視され、基本的には小規模で行われる」(中村, 2008)が特徴であり、次々と展開される同種の活動の中でも引き継がれている。

また、開催する場所は多様であり、目的や主たる参加者層ごとに使い分けられているわけではない。宇都宮市での地域の居場所に関わる研究では、「近隣施設(自治会集会場など)」「地域施設(コミュニティセンターなど)」「空家・空店舗」「個人宅」「福祉施設」などで展開されるが、例えば高齢者を対象とするふれあいサロンが「近隣施設」や「地域施設」「空家・空店舗」「個人宅」で実施されているし、子どもを対象とする青少年の居場所づくりが「個人宅」や「福祉施設」で実施されるなどしている(坂本, 2016)。これは地域事情が反映されたり、複数の目的での実施が影響していたりもするが、目的を果たせるかが重要であり、多分に地理的条件や空間から制約を受けるわけではないと考えられる。

## 実践事例

筆者とゼミ学生らがA県B市内で一人暮らし高齢者対象の「カフェ活動」を実施した事例を紹介する。これまでのところ、2015年10月、11月および2016年1月にそれぞれ1回ずつ、計3回実施している。

もともとこの活動は同市にある病院と月1回実施している「相談会(健康・生活)」をベースに派生したものである。また大学コンソーシアム富山からゼミ学生が助成を得たのでその実践的学習の一部とすることができたことも要因である。

「相談会」が健康問題・生活課題について専門的な支援(相談会後に対応するものを含む)に重点が置かれているのに対して「カフェ活動」は気軽に立ち寄る場であり、ともに楽しい時間を共有することを目的とした。この位置づけには、学生にとって専門性を問われることなく平易に場の形成ができるという特徴があり、そのことは参加者である一人暮らし高齢者にとってもまた同様に参加しやすい場であり機会であった。もともと第1回目は参加者3名から始まったのであり、最初から賑わったのではないが、2回目・3回目と回を重ねて参加者が増えた。第1回目が様子見となり、参加した人から情報を得た人らが交流を求めて加わったものと思われる。また、第2回目は一緒に調理する「協働炊事」を入れたことで、イベント性と調理体験・会食の実益的要素が加わり関心を集め、参加意欲を刺激したということもある。



図1 カフェ風景—協働炊事の様子



図2 カフェ風景—テーブルを囲んだ歓談

図1は協働炊事の風景で、調理後に会食しているところである。この前には持ち込んだ食材を切り分け、また後には片づけを一緒に行った。この時に作ったのは豚汁だが、男性でも比較的簡単に作ることができて野菜を豊富に摂れることは参加者にとってわかり易いメリットであり好評であった。他に料理では段取りを考えて作ること、一緒に作ることで教える・教えられる交流が進み、身につきやすいことなども効果として指摘できる。さらに空腹が満たされた後、歓談する中で生活の話題に及び、そこに見えてくる問題を居合わせる者が認識し共に解決方法を考えるという機会にもなりうる。実際に、参加者の一人がスマートフォンの操作が分からず、その場にいた学生が試行錯誤しながら扱い方を一緒に見出していくということがあった。

図2は別の日の相談会場面であるが、定時に皆が揃わねばならない堅苦しさはなく、ぼちぼちと始め、途中からでも加わる状態であることが短時間でも参加してみようという気持ちの形成に好影響する。そして大体の参加者が揃ったところで、共通の話題について話すという方法を取ることで、参加することで何かを得る機会になる。今後の活動では、活動の参加者の生活課題や高齢化に伴う共通の課題について、情報提供したりどのように対応していけばよいかを話し合ったりする場としても機能させる予定である。

「カフェ活動」のいずれにも共通することは、「対話・交流」があることである。対象が一人暮らし高齢者であるだけに、「気づいたら一日誰とも話していない」経験をする人がいる。このカフェ参加者にも「普段話す機会が多くないので話ができてよかった」という率直な気持ちを述べる人がおり、東京都日野市など他の場所で行われる類似の活動でも同様の声が確認さ

れる。

#### 4. カフェ型活動の意義

上述のように、主とする目的のために集まる「カフェ型活動」の特徴として、「日常的に利用され双方向的なコミュニケーション(対話・交流)がなされる小規模な場所」であることが求められるのは、目的をより良く果たすためであり、その場が仕掛けとして重要な意味を持っているからではないかと思われる。目的があれば誰でも集まるというのは一見もっともな説明であるが、実際には目的を果たそうと能動的に動く人がいて、受動的に構えている人の参加行動を促す工夫が必要である<sup>3)</sup>。後者への対応のためには強制的でなく自発的にその場を求めてくるような魅力と垣根の低さが同時に求められている。

また、集うこと自体が目的としてあり、それを介してその後に種々の活動の展開を予定する場合も見受けられる。さわやか福祉財団が1991年に開始した「新しいふれあい社会の創造」の活動は「ふれあいの居場所」づくりという形で全国的に展開され、地方自治体が施策に取り入れ財政的な支援をしていたり(長岡京市, 2014)、国の生活支援コーディネータ(地域支え合い推進員)の研修の一部に関連資料が使用されたり(さわやか福祉財団, 2015)するなどしている。開始当時は介護保険制度もなく、高齢社会化が進展する中で、まずは孤立化するかもしれない高齢者層を主な対象として彼らを地域で支える仕組み作りが急務であった経緯がうかがわれる。このふれあいの居場所に集った人らに対してさらに支援の手を伸べる展開が構想されている。

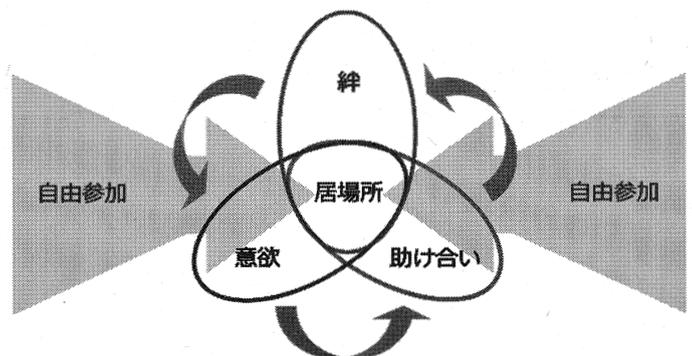


図3 居場所の意味と機能(さわやか福祉財団, 2015, p41を一部改変)

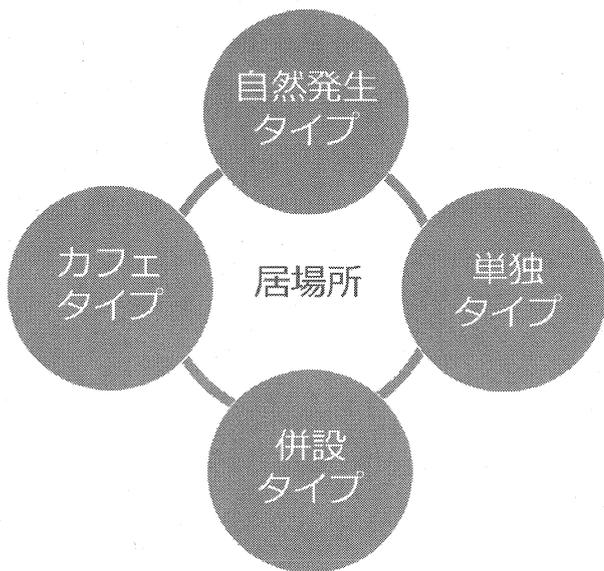


図4 居場所の類型（さわやか福祉財団，2015，p42を一部改変）

図3には居場所は「絆」「意欲」「助け合い」を併せ持つところであり、相互に(相乗的に)関連し合っているのであり、また自由に参加することができることが図示されている。また、図4には類型が示されている。「単独タイプ」とは「ふれあいを目的」として一からつくるもの、「併設タイプ」は「既存の活動から発生」し「それまでの活動での人脈も活かしながら」展開するもの、「カフェタイプ」は「ふれあいを目的として食事や喫茶を提供」し、気軽に参加できるもの、「自然発生タイプ」は「世話焼きの人を中心に、仕掛ける意識なく自然に始め」られるもの、とされる。それぞれ峻別できるかは定かでないが、居場所が創出されるプロセス・目的に注目した分類であるといえる。

こうした居場所の持つ意味や多様な展開の可能性は上述のものに限られる内容ではないし、対象者を高齢者など特定者に限るものでもない。東京都豊島区で行われている「まめの樹」の主に若者を対象にした活動はNPO法人によるものであり、就労支援を行う場所でありつつも、最初にあるのは「社会的自立」への促しであり、利用者にとってはその場へ来る行為自体に意味がある。

## 5. 「カフェ型活動」の課題

上述のように、「カフェ型活動」は誰もがアクセスしやすいことが特徴であるが、カフェの形式をとれば必ず人が集まるとは限らないことが明らかになっている。(坂本, 2015) 高齢者施設に設けられた地域交流室を地域住民に開かれた場所にするため、施設利用者

以外も利用できるカフェを開設したケースでは、開設時に自治会に飲み物無料券を配布したものの地域住民の集まる場とはならなかった。施設に対して住民が抱くイメージや地域交流室とはいえ多くの高齢者が住む場所に入っていくことへの抵抗感が影響しているかもしれない。

他に、継続的な実施の点では、運営費用も課題である。費用を集めることだけでなく、集まったお金を管理することもある。民間の自主活動としてならば形態は基本的に自由であるが、例えばNPO法人等で公益的な活動として行うならば、規模が大きくなり、助成や寄付を得て活動する場合も出てくる。そうなれば収支の管理は厳しくなり、組織としての活動には報告書作成も付随してくる。そうした対応力がなければ継続的な活動は困難になると考えられる。

さらに担い手の課題がある。開設時は若年層が運営の中心であるとしても、安定的な活動を維持するには担い手の育成・確保は重要である。同時に、常に複数名で管理運営できる態勢が安定的な場づくりには必要で、ただ一人のキーパーソンに依存しすぎると、その者の都合如何で実施が左右されてしまう問題が生ずる。

こうした問題は「カフェ型活動」に特有ではないし、類似の課題は民間活動において指摘されてきたものである。様々な形態で広がった「カフェ型活動」が地域に定着していくためには各回の実施とともにその前後の準備・振り返りを通じての調整や協議もまた継続的に行っていく必要がある。

## 6. 最後に

本稿では「カフェ型活動」に注目し、その特徴や現状、また意義や課題について論じた。

決して目新しくないこの形式の活動が全国的に広がるには理由があると思われる。それは、堅苦しくなく(専門的すぎず)、同時に無目的の茶話会でもない(何らかの参加の意図が設定できる)ところに、参加してみようという行動を促す要因があり、また人との交流・対話や新しい知識を得ること、その後の生活のしやすさ(改善)につながることで一種の報酬となり、継続的な活動参加につながっていると考えられる。

居場所の意義との関係では、就労支援策の中で社会的居場所を設ける際、ただ居心地の良い場所であるだけでは「滞留現象」を生じさせてしまうという懸念もあるが、「カフェ型活動」の場を単に触媒として扱い、主目的(就労等の成果)に適わなければその場の意味

はないというのは誤りであり、その場に参加すること自体が歩みを進める一つの行動であると捉える見方が必要である。

このような考え方の議論や検討を含め、「カフェ型活動」の意義を今後も追究したい。

謝辞：本稿は、平成27年度大学コンソーシアム富山「学生による地域フィールドワーク研究助成」を得て実施した研究成果の一部である。また本成果は、本稿に挙げた「カフェ活動」に参加した方、地域の協力者からの助力の賜物である。記して感謝の意を表します。

## 参考文献

北日本新聞(2015)：「哲学カフェ県内で盛り上がり」  
2015年5月30日朝刊  
木村康子(2011)：コミュニティカフェ「ふれあいサロン」考—東京都日野市、ゆたかなくらし、2011年6・7月合併号、p176-179  
京都府長岡京市(2014)「ふれあいの居場所づくり」をみんなで考える協働プラットフォーム平成23年度事業報告書 協働による「ふれあいの居場所」の始まりから一層の広がり発展を目指して、p3  
厚生労働省(2015)：『認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）』（概要）、p5  
坂倉真衣(2015)：子どもたちの視点から考えるサイエンスカフェと小学校理科との連携の可能性：親子を対象とした「コドモ to サイエンスカフェ」を事例に、科学技術コミュニケーション(18)、p31-44  
坂本文子(2015)地域の居場所とは何か—ソーシャ

ル・キャピタル醸成に向けた事例研究—、平成26年度市政研究センター研究報告、p54  
里裕一(2015)：認知症になっても生きている喜びが実感できる場所づくりを、看護(2015.10)、p70-72  
さわやか福祉財団(2015)：『新地域支援 助け合い活動創出ブック 足りない助け合い活動の創出とネットワーク作り』（非売品、5000部発行）  
孫大輔(2015)患者—医療者の壁を超えたフラットな対話の場づくりを、看護(2015.10)、p80-83  
中村征樹(2008)：サイエンスカフェ：現状と課題、科学技術社会論研究(5)、p31-43

- 
- i 2018(平成30)年度からすべての市町村に配置される認知症地域支援推進員等の企画によることが期待されている。
  - ii 分化した組織・コミュニティをつなげるために対話の場を設け、多様な人が集まって「現状・問題の共有」、「ビジョンの作成」、「問題解決の方法の探索」などを行う。共有の視点は異なるが、他にAI、OST、フューチャー・サーチなどの方法がある。  
ワールドカフェコミュニティジャパン[https://sites.google.com/site/wholesyscafe/home/about\\_worldcafe](https://sites.google.com/site/wholesyscafe/home/about_worldcafe) に詳しい。
  - iii 民間活動の高まりは1998年以降のNPO組織の増加と定着(継続)に現れるが、主体的に活動を形成するにはなかなか至らない潜在的な関心層への対応が求められる。